

「くまの子ウーフとたのしい仲間たち 神沢利子展」

7月19日(土)～9月15日(祝・日)



「ウーフを作ってみよう」より

+++++  
神沢利子さんおはなし会  
「同じうたを  
うたい続けて」  
8月1日(金)  
+++++

本展の開催に伴い、神沢さんと児童文学誌「小さい旗」主宰・水上平吉さんによるおはなし会を行いました。

神沢さんには、一つ一つの作品に対する思いや、自身の来し方について語っていただいたほか、新刊のご著書からすてきな詩の朗読もありました。

かわい参加者とのやりとりなど、会場はあたたかくやさしい雰囲気になりました。

小学校の国語教科書でもおなじみ「くまの子ウーフ」の作者、神沢利子さん帰郷の展覧会を行いました。神沢さんは、旧戸畑市(現北九州市戸畑区)生まれ。すぐに東京、北海道へと転居されますが、福岡県出身のお母様を通じ、故郷への思いは常にあったそうです。会場では、貴重な原稿やイラスト入り創作資料などのほか、北九州へ寄せる想いのインタビューも紹介しました。

展示資料 約八〇点  
入場者数 二六三〇人  
(八月三十一日まで・イベント含む)

神沢 母からは、私の生まれた

戸畑の話、母の生まれ育った福岡の話をしばしば聞いて育ちました。

私が物心ついたのは札幌です。それからすぐに樺太(現・サハリン)へ渡りました。十三、四までそこへおりました。その間母親から何度も故郷の話聞きまして、本当に、故郷とは懐かしいものだろうな、と思いました。

母は福岡の大名小学校へ通い、女学校を出てすぐに、数年十九くらいで結婚したようです。父親は炭鉱勤めであちこちへと赴任先が変わりましたから、「里帰り」ということはしたことがないんじゃないかと思えます。

夫の後について、子を六人も生んで、当時は地の果てと思われていた樺太まで。父親は、炭鉱が大きくなるとイヤみたく、露天掘りといわれるような、開発の初期段階ばかりを追いかけるんです。だから、不便なところばかりで。小さな町、村で、たくさんの子を育てて暮らした、そういう母でした。

その母は、どんなに故郷を恋しがったろうなあ、里帰りもしたことなかったんだろ。うなあ、と。自分が年をとってからしみじみと思います。ここへ来ると母のことばかり考えられますね。

水上 結核で病気がちの少女時代を送りましたが、十七歳のときに学校の先生から宮沢賢治を薦められたそうですね。

神沢 学校の図書館にあった立派な宮沢賢治全集でした。開くと薬品の匂いがぶんと、上質の紙に書いてあって。

最初に読んだのは「銀河鉄道の夜」だったか。とにかく、活字一つ一つが宝石のようにキラキラ光って、目に飛び込んでくるようでした。そして、とても透き通った音楽が聞こえてくるんです。そういう感覚を味わったのは、宮沢賢治が最初でした。十七歳のときです。

この話をすると、いぬいとみこさんも「私も十七歳のときに読んだのよ」って。共感してよくその話をしました。



神沢利子さんと水上平吉さん

神沢利子さん  
おはなし会アンケートより

- ◇とてもステキな神沢先生に魅了されました。エッセイなどもぜひ読ませていただこうと思いました。(二十代 女性)
- ◇本人のお話には人柄が表れる。年を重ねたすばらしさのオーラがありました。(五十代 女性)
- ◇詩の朗読が心に染みしました。(四十代 女性)
- ◇母から母へと続いていく中に物語が生まれ育つこと…ちよっとナミダでした。(六十代 女性)
- ◇神沢さんの本は一冊一冊に思いをこめて書いていることが分かります。(十五歳以下 女性)
- ◇ぼくはウーフのお兄ちゃんになりたいです。(十五歳以下 男性)